

第2回 長浜市総合教育会議 議事録

I 日 時 平成30年10月17日（水曜日）13時30分～15時00分

II 場 所 長浜市役所 本庁舎3階 特別会議室

III 出席者

【構 成 員】 藤井勇治市長、板山英信教育長、井関真弓教育委員
西橋義仁教育委員、西前智子教育委員、美濃部俊裕教育委員

【オブザーバー】 大塚義之副市長

【事 務 局】 米田教育部長、岩田教育委員会事務局次長、
横尾教育委員会事務局次長、土田教育改革推進室長、
伊藤教育指導課長、大田すこやか教育推進課長、
大音幼児課長、今井教育総務課長代理、
藤田生涯学習文化課長、川瀬市民活躍課長代理、
古田総合政策部長、横尾総合政策課長、
柴田総合政策課長代理
ほか担当職員（2名）

【議事進行】 古田総合政策部長

【傍 聴 者】 1名

【報道機関】 無し

IV 内 容

1 開 会

2 市長あいさつ

（要旨）

- ・ 第2回長浜市総合教育会議の開催にあたりまして、一言ご挨拶申しあげる。教育委員の皆様におかれましては、日ごろから、子どもたちの教育の充実と発展、そして健全育成のために、大変なご尽力を賜っておりますこと、感謝申しあげる。
- ・ さて、本日の会議のテーマは、「若者のふるさと回帰を図る取組について」である。
- ・ 現在、全国的に進んでいる人口減少、少子高齢化という、今まで体験したことのない大きな社会現象に直面している。政府も人口減少、少子化を国難と位置づけ、様々な政策を地方創生ということで打ち出している。長浜市では子育てをしやすいまちにしようということで、妊娠から出産、子育て、学校教育まで、切れ目のない支援策を打ち

出し、小学校の給食費無償化や、保育料の減免措置をするなど、人口減少に歯止めをかけたいという思いで、全国の都市でも例のない施策を打ち出しながら、長浜市が選ばれるまちになりたいという思いで地方創生に臨んでいる。

- ・その人口減少の中で課題としてあがってきたのは、高校卒業までは長浜市に住んでおられるが、大学進学や就職などを機に市外へ転出し、そのままふるさと長浜へ帰ってこない、あるいは帰ってこられない若者が多いという状況が続いていることだ。全国の市町にとっては、大学等が都会に集中していることもあり、首都圏への人口移動による人口減少が著しい状況にある。
 - ・若者の人口減少により、将来の人材不足、活力不足が懸念され、これまでの経験則では解決が図れないような様々な課題がたくさん出てくるものと思う。
 - ・教育についても、これまでと同じやり方では立ち行かない時代を迎える中で、新たな発想で、新たな取り組みを進めていく必要がある。
 - ・いつの時代にあっても普遍で大切なものは「人づくり」、「人材育成」である。
 - ・現在、長浜市総合計画の重点施策として、「長浜人づくり」プロジェクトを進めている。そのプロジェクトでは、地域社会との関わりを増やし、地域を知ること、若者のふるさとへ帰ってきたいと思う気持ち、そして自ら未来を創造していく力を育てていくための、事業を推進しているところである。
 - ・長浜市に生まれ育った子どもや若者が、大人になっても住み続けたい、また一度転出した若者が、帰ってきたいと思えるように、子ども・若者の時にできる取組、行なうべき施策について、意見交換をお願いしたいと思う。
- ・教育委員のみなさまと行政が今後の長浜市の教育のあり方について忌憚のない意見交換を行い、子どもたちを育む環境について、より良い方向性を見出すことができることを心から期待してご挨拶とさせていただきます。
- 本日は、よろしく願います。

3 意見交換

議事

「若者のふるさと回帰を図る取組について」

(1) 重点プロジェクト「長浜人づくり」プロジェクトについて

- ・「長浜人づくり」プロジェクトの現状、課題を長浜市の転出入の現状を交えて説明。

(2) 未来に輝く長浜人育成事業について

- ・「未来に輝く人づくりバンク事業」「未来に輝く人づくり授業等実施事業」による

高校生への働きかけと今年度の様子について説明。

(3) 高校生 Challenge&Creation プロジェクト事業について

- ・高校生に参加いただいた「まちなかスイーツプロジェクト」「本のまち木之本ポスタープロジェクト」の事業及び今年度の様子について説明。

〈意見：教育委員〉

日頃、園や小中の教育・保育に関していろいろなことを考えたり、現場を見たりしており、高校生を対象にこのような取組をされていることを初めて知った。人口流出については、長浜市全体が若者にとって魅力ある町になっていかないと難しいのではないかなと思う。長浜バイオ大学や滋賀県立大学に県内の高校から進学した学生がどれくらいいるのか知りたい。その学生が中心になって、長浜市に提言をしてもらうような取組も必要なのではないか。様々な取組がなされているが、何年かにわたって継続して取り組む必要があると思うが、どういう計画になっているのかまた教えて欲しい。このプロジェクトに参加した高校生が卒業後に長浜市を離れたときにどのようなつながりをもっていかかということが大きなテーマかなと思う。新しい土地に住んでしまうと長浜市全体のことを思い出す機会がほとんどないのではないかなと思う。それを繋ぎ止めるために、少なくとも事業に参加した高校生をどう長浜市と繋ぐかに焦点をあてた事業も必要なのではないか。1つの提案として、月2回発行している「広報ながはま」を送付して長浜市を見てもらう取組があってもいいのではないかな。そうすると、県外に出た若者も長浜市の取組や自分が高校生のときに参加していた取組が引き継がれて続いていることを知ることができ、つながりをもってもらうことができるのではないかな。教育委員会の私たちも初めてこの取組を知ったので、できれば市役所内の横のつながりとして、現在この取組をやっているということを教育委員会にもわかるようにしてもらえると、我々の意識も高まるのではないかなと思う。

〈意見：教育委員〉

小中学校では、学校の特色ある学習ということで、自分たちの通っている学校の偉人や歴史などを学び、地域の方々にも参加いただいて、地域に誇りを持てる学習を実施していると思う。

昔は放課後や土曜、日曜日の時間を、塾や部活やスポ少以外の過ごし方として、気の合う子ども同士で遊んでいて、そこでつながりがあったが、現在の子どもたちがどのようにつながっているのかはわからないが、学校を超えてのつながり、人と人とのつながりは大事だと感じた。

高校生に対してプロジェクトを実施されているが、企業対子ども、という印象を受けた。1回2回きりのプロジェクトではなく、継続性があり、もっともつつながりが深まり、いろんな悩みを相談し合えたり、子どもたちがずっとつながっていけるところがあるといいなと感じた。例えば外に出てしまっても連絡が取り合えたり、悩みを相談し

合えたりするなど、つながりがあるからこそ、長浜市に帰ってきたくなるのだと思う。自分を迎えてくれる人がいるということが大事ではないかと思った。学校だけでなく、深いつながりができるといいと感じた。

全県一区になり、県南部の高校への進学が増えている。今年もおそらく 100 人以上が県南部の高校に進学するのではないかと思う。伊香高校には二十数年前は 1 学年 9 クラスあったが、現在は 1 学年 3 クラスとなっても定員割れで、昨年、新長浜北高校ができたもののやはり定員割れであった。若い世代にとっては、子育て環境を考えたとき、学校も重要な要素であり、高校を守っていくために長浜市としてどうするのか考えていく必要があるのではないかと思う。

滋賀県内の教育委員の集まりのときに、全県一区になって一番大変なのは長浜市さんと高島市さんと、など言われたりして、危機感を感じた。子育ての条件として、学校のあり方も考えていく必要があるのではないかと感じた。

〈意見：教育委員〉

事前に資料をいただいていたので、家族や知り合いと話し合った。誰もが思うことだが、地元には仕事がないということであり、難しいことだと感じた。

先日、帰宅時に偶然、元教え子と電車に乗り合わせることがあり、話す機会があった。やはり就職先のことを一番にあげていた。また金髪で予備校に通っていたらあれこれ言われ、滋賀大に入学したら、こういう力があるのか、とごろっと見方が変わるといったような田舎独特の環境が嫌だとも言っていた。

このような取組をどれくらいの期間で進めるのかという問題もあるが、まず今の若者がどのような意識なのか、何を魅力と感じ、何が嫌なのかということも重要だと思う。先ほどの学生は何か自分でやってみたい、といったような力のある学生なので、この辺りの企業に勤められたらいいな、と思っている学生とはまた考え方が違ってくると思う。

もうひとつ、自分と同じ世代の人と話をしていると、やはり親が小中のころから地域の人との触れ合いを積極的に行い、親も地域のことに積極的に関わり、直接子どもに言うか言わないかはあるが、子どもにこちらに住んで欲しいというメッセージを送る親と、子どもに対し自分たちのことは考えなくていいから自由にしなさいと開けっぴろげに言い、子どもが帰ってこない親がいる。まず、若者と親世代が教育など、どういう地域でいて欲しいのか、望んでいるのかということも調査する必要があるのではないかと感じた。

〈意見：教育委員〉

私自身、子どもには高校卒業後、家を出るよう伝えている。大学卒業後はチャンスがあれば日本を出るよう伝えている。長浜は居心地がいいが、学生のとくにいろいろな価値観の人と出会い、いろいろな刺激を受けて、いろいろなことにチャレンジして欲しいと思っている。自分が今まで育ってきて、正しいことや、これでいいと思っていたこと

が、実は全然違ったりするようなことを経験して欲しい。長浜がよくないから出て欲しいわけではなく、人として成長して欲しいという思いで子どもには話している。就職については、長浜に帰ってきてもいいし、自分が思う道を選択して欲しいと思っている。子育ては長浜に帰ってきてくれると非常にうれしいと思う。

長浜が大好きで離れたくない20代の若者もいる。本当に良い子たちが長浜にいてくれると思っている。

プロジェクトの活動でスイーツのパンフレットを作成されているが、例えば、新しいスイーツをお店の方たちと一緒に開発して商品化するところまでであると、子どもたちはもっと頑張ってくれるのではないかと思った。子どもと一緒に何かを作り出す企業がもっと増えていただけると、商品を作っていく過程で悩んだり、勉強をしたりすることもできると思う。長浜っていいところだな、と思えるような経験を子どもたちがしてくれたらいいなと思う。

〈意見：教育委員〉

市の取組は素晴らしいことだと思う。この考え方を各地域でいかに広めていくかということが長浜市をレベルアップしていく基になると思う。各地域にまちづくり協議会があるが、そこで何か若者が地域に愛着を持つような取組ができないかという輪を広げてもらうことも長浜市の役割の1つだと思っている。実際、やってみると若者は案外集まってくれる。以前、通学合宿という取組があり、その際に学生をアルバイトとして雇ったが、彼らが子どもたちを指導することもあった。従来の地域の伝統的な行事には、年配者しか集まらないのが通例かと思うが、一工夫することで思わぬ若者が集まってくるという経験をした。各神社でされる秋祭りで若者が集まるイベントができないかと計画し、宮さんの隣を流れる川で、オブジェクトに灯りをつけたり、宮さんに通じる道路に灯りをつける取組を6年ほど前に始めたところ、若者が集まって祭りを盛り上げてくれ、現在もそれが続いている。

まちづくり協議会や自治会を通じて、長浜市の取組を紹介しながら、地域で輪が広がってくるようなことを考えて欲しい。

〈市長〉

さまざまな課題があるが、県立高校の全県一区制が導入されて10年経過した。メリットは中学生が希望する学校を選択できる制度であるが、流れは県南部に集中している。県教委は県下の優秀な生徒の膳所高校一極集中を目指したのではないかということなど、県13市の市長会で総点検しようとして議論している。膳所高校は成長していると思うが、他の高校の学力が低下することがあってはならない。県教委は全県一区制の見直しはしないと思うので、制度の中で、どういう風に県立高校が生き延びていくのかは各高校にかかっている。市内の県立高校との意見交換においても、南部の生徒も湖北に呼び込めるような魅力ある学校運営をしてほしいと要請している。努力をさせていただいているが、全体として、南への流れを止められていないのが現状にある。全県一区制のメリ

ットとデメリットが出ている。

日本の風習として誰が家を継ぐのか等のあり方があるが、現在はひとり一人の生き方を尊重するという考え方に社会の風潮が変わってきた。私自身、一度は東京、大阪等で過ごして、5年10年したら、いずれは長浜に帰ってきて欲しいという提案をしている。長浜に縁のない人にも移住・定住の呼びかけをしている。就職先がないという指摘もあるが、現在、長浜市には約3,300人の外国人住民がいる。湖北のものづくりの現場は外国人に頼っている。若い働き手が外に出て行ってしまうのとは裏腹に、外国人人口は増えている。

ふるさとの良いところを再発見してもらって、魅力を感じてもらおうということも必要でないかと考えている。先日の「浅井あっぱれ祭り」の運営は、長浜北高や浅井中学校の生徒が支えてくれ、「大道芸 in 虎御前」でも虎姫中学校の生徒が手伝ってくれた。イベントに中学生、高校生のときから参加してもらうことも地域のよさの再発見につながるのではないかと。

〈教育長〉

昨年度1,207名が市内中学校を卒業し、うち428名が長浜市外へ進学している。長浜市の高校が定員割れしているにもかかわらず、市外の高校に進学している。平成27、28年度についても調べてみると、平均で約400名以上の生徒が市外の高校に進学している。長浜離れは中学校卒業の段階から始まっているのではないかと感じた。

長浜市だけの集計だが、平成30年度4月1日付で市内の公立の小中学校に新規採用で赴任した職員は31名で、うち長浜市出身は6名であった。最も多い市町が彦根市出身で11名という状況である。彦根市、大津市など他市へ配属された職員を含めると長浜出身者の教員がどれくらいいるのか不明だが、教育委員会でも追跡調査を進めたいと思う。長浜市に新規採用される小中学校の教員の最も多い出身地は彦根市であるのが現状である。とすると、中学校卒業と同時に長浜市を離れる傾向が見られ、教員の採用等にも影響しているのではないかと。幼児教育職については、今年度の受験者45名のうち37名が長浜出身者であった。幼児教育職については、地元で育ち、地元に戻ってきているのではないかと。

先ほど説明のあった長浜市の人口の推移は非常に興味深いところだが、是非知りたいのは、20代で長浜を離れる人が300名いたとするとその本当の理由は何なのか、長浜に若い人材を戻すとしたらどの層に焦点を当てるべきかということを確認にすることも必要だと感じた。中学生の段階からある程度考えて取り組まないと、高校に進学してからでは厳しい気がする。

公立高校の問題も出ていたが、昨年、長浜市から彦根東高校に56名進学している。一気に増えているわけではないが、減少傾向は見られず、来年も同様の傾向になると思われる。長浜で育った優秀な生徒が彦根東高校から大学へ進学し、結果として長浜市に戻ってきているのか、教育委員会としても追跡調査をしたうえで、それぞれの分野で対策を立てなければならない問題だと思う。

〈意見：教育委員〉

先ほど市長から家族制度の話があったが、私が現職のころ、同僚が長男を跡継ぎにするために大学進学ではなく、高校卒業後は地元就職させるという話をしていた人もいた。現在は地元企業に勤めておられ、跡を継がれている。大学へ行っていたらおそらく地元には帰ってこない可能性が高かっただろうと思う。誰に跡を継がせるかなど信念を持って子どもにしゃべっていたとのことであった。

6 その他

〈事務局〉

本日の議事録については、内容を委員の皆さまに確認いただいたのち、ホームページにて公開する。平成30年度第3回目の総合教育会議については、1月初、中旬ごろに開催を予定している。

7 閉会

教育長あいさつ

（要旨）

本日は貴重なご意見・ご提言を賜り、ありがとうございました。一人でも多く若い人材を育てたいということが共通の願いだと思いますので、今後ともよろしく申し上げます。

15時00分 閉会